

ミリムの弟

西鍋ヒリカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

▼姉からは にげられない !

目次

ミリムの弟	1
魔物の統率者	6
魔物の統率者②	13
遥か遠き望郷の黄金郷（エルドラド）	19

ミリムの弟

人里離れたジュラの森。その中でも封印の洞窟に近い辺境にポツンと存在する小屋。そこが、現在の俺の棲家。

小屋の中は、中央に卓、側に椅子、壁の一方に書架、もう片方に台所や暖炉もろもろ。そして窓の下にベット。小屋を、木を切り倒すところから建て始め、間取りも素人の浅知恵で考えてみたが、そこで生じた多少の不便さは、住んでいるうちに、慣れた。

―本を置き、椅子から立ち上がって、窓を開ける。

すると、森のさわやかで新鮮な空気が部屋に吹き込んでくる。

見渡せば、木々が生い茂り、時折、小動物がちらほらと見受けられる。陽当たりもなかなか良く、ポカポカとした陽気に包まれる。

「ああ、平穏だなあ。」

しみじみとこの安寧の生活を噛み締めること、数分。

思い切り、背伸びしてから、窓を閉めて、読書に戻ろうと椅子に腰掛ける。

そのときだった。

突如として、かの暴風竜ヴェルドラの気配が消えたのは。

……。

……。

……。

「こりゃ、引つ越さないといけないかあ……。」

先程の爽快感は霧散し、陰鬱な気分が胸の中に立ち込める。

はあ、と大きなため息を吐いて、俺は次の住居のアテを考えるのだった。

*

なぜ、わざわざ住み慣れた家を離れるのか。

そう思われても仕方ないと思う。

だが、一身上の都合とはいえ、理由はあるのだ。

それを語るにはまず、俺の出自について説明せねばならない。

俺の名は、セリム・ナーヴァ。

かの星王竜ヴェルダナーヴァが父にして、あのミリム・ナーヴァを姉に持つ、この世界にたった二人しか居ない、真正銘本物の竜魔人ドラゴノイドなのである。

：ならばどうしてコソコソとこんな辺鄙な場所に住んでいるのか。などと疑問に思うことだろう。

ここで例の一身上の都合が関わってくるのであるが、端的に言ってしまうえば、自分は、弱い、のである。

そりゃあ、確かに人や並大抵の魔物よりは強いとも。

だがしかし、父は偉大なる始祖の竜であり、姉は破壊デストロイの暴君とかなんとか呼ばれているミリム・ナーヴァなのだ。

半分とはいえ、竜種の血が流れているのだ。その程度強くなくては、産まれたことを恥じ入って、一生穴蔵から出てこない確信がある。生まれにしては、最低限の力は持ち合わせている。

そう、最低限の、という但し書きが付いてしまう程度の力しかない。同じ姉弟でありながら、姉の痼癩すら止められないのだ。話にならない。

それほどに、俺は、弱い。

生まれながらの竜種の恥晒し。それが、俺なのだ。

はあ…、と一層大きなため息を吐く。

皿を洗う手が止まっていたようだ。ガチャガチャと、洗う作業を再開する。水場は、好かない。自分の不甲斐なさが想起しやすい。無心に近い状況になるからだろうか。それでも、必要なことなので、やるにはやるが。

これが終われば、とりあえず、住居の見当をつけ、片付けに入らなければならぬ。

良物件だった。惜しい、とは感じる。けれど、手放すのは確定事項だ。なぜならば、暴風竜ヴェルドラが消えた。封印されていたのは知っていたが、消滅にしては、時期が早過ぎる気がしなくもない。

だが、消えたものは消えたのだ。何にしろ、移動せねばならない。魔王たちがジュラの森の不可侵条約の解消も、そう遠くはない。そうなれば、姉が来てしまう。早く、早く……。

……焦りは禁物だ。焦ったって、上手く行きはしない。今までだってそうだった。

功を焦って、死ぬほど痛い目に、詳しく思い出したくないほど酷い目にあつたことがあつた。地道に、コツコツと。何が必要か。どうすれば手に入るか。順序を目的から手段へ遡って考える。一つだけはダメだ。最低でも、四つ。候補を決めろ。

「あれ、小屋がありますよ。」

「おお、本当だ。ツイてるな。」

「こんな辺鄙な場所だ。捻くれたバアさんじゃないといいがな。」

……外から声がする。恐らく三人の冒険者か。消えたヴェルドラの調査にでも来たのだろうか。いや、にしてはとんでもなく早いので、封印の洞窟自体の調査に来ていて、偶々、ヴェルドラが消滅したタイミングだったのか。どんな偶然だ。

一旦、手を洗い、拭いて、扉に向かう。

取り敢えずは、この御客人のお相手でもしてから、考えよう。

「へえ、ずっとここに住んでるんですか。」

「随分な変わり者だな！ 魔物も多いってのに。」

「さすがに失礼やしませんか、リーダー……。」

三人に茶を出す。さすがに、椅子は一脚しかないもので、机を退かし、申し訳ないが、床にコップを置く。椅子がないのに、食器類が沢山ある理由は、ホラ、その、……趣味だ。来客は、数百年来、無い。

どうやら、こちらをヒトだと思っっているようで、何故街に住まない

のか、魔物の襲来とか不便なことは無いのか、といった質問もしてくる。生憎と、寿命の違いやら、そもそも竜種の気配が濃いので魔物は近づきにくいことやらあるので、なんやかんやでこの場所は都合が良い。それも、手放さなければならぬのだが。

「暴風竜ヴェルドラも、いなくなっちゃいましたもんね。」

彼らには、ヴェルドラの住処が近くにあるので魔物がそこまで寄つて来ないことにしてある。あと、多少なりとも腕が立つとも。

実際、数十年に数回、血気盛んな魔物が襲ってくることもある。だいたい、夕飯の肉に変わるが。わざと残酷に殺しているので、その世代の魔物なら暫くは襲撃してこないのだが、世代が変わるとまた別。

たまに、家にも被害が出るので、近年は魔物避けの呪いをしている。「なあ、アンタ。街まで来る気は無いか？ドラゴンがいなくなったら、魔物どもが活発になってくるんだろ。危険じゃねーか。」

「確かに、知り合いが魔物に襲われましたー、つてのは目覚めが悪いな。今なら、護衛しますぜ？」

優しいな、彼らは。見ず知らずの相手にここまでの親切にできるなんて。しかし、悲しいことにその好意は受け取れない。

この森を出て行く気はあるが、残念ながら、まだ片付けが済んでいない。そう時間もかからないうちに身支度が済むとはいえ、数日は必要だ。

「心遣い、感謝する。だが、心配無用だ。準備が出来次第去る予定だ。」

「その間、魔物に襲われたら？」

「そのときはそのとき。必死に抵抗するさ。」

本当はそんじょそらの魔物じゃ、傷一つつけることは叶わないのだが。竜種は伊達じゃない。

ハハハ、と笑えば、少し心配そうな目を向けられる。

なので、山育ちだから大丈夫。と冗談めかして言う。

「心配だな。」

「心配だぜ。」

「心配ですね。」

めっちゃ不安がられた。

三人衆を見送ったところで、運搬用の台車を作る。
明日は本格的に荷物をまとめ始めなければならない。
スピードが命。しかし、焦ってはならない。

一つの焦りが全てを台無しにすることだっただってあるのだ。
昔、やらかした。

ーよし。

そうこう考えているうちに台車が出来た。

空を仰げば、一番星が見える。

もう夜だ。そろそろ寝よう。数日かけて準備を整えよう。

そう思って、我が家に入った。

魔物の統率者

引越すに当って問題が生じた。
いつジユラの森を出発するかだ。

遅すぎるのは言うまでもなく、早すぎると姉ミリムに俺が既にジユラの森にいないと勘付かれてしまう。

そうなれば、文字通りすぐさま跳んでくるだろう。

それだけは、絶対に避けなければならぬ。

――ならば、一体どうすればいいのか。

荷物を積む作業の手が止まる。

まただ。ネガティブな感情に取り憑かれ、やらなければならないことさえ手に付かなくなってしまう。いつもそうだ。いつだつてうだうだと悩んで、どうしようもないと立ち竦んでしまつて。情けない。竜種の血を引いているのに、自由気ままに生きることすらできない。恥晒し。出来損ないが。だからいつまでも、姉や彼らに……………。

深い溜息を吐く。

顔を少し上げる。

……………。

魔王たちが集まるだけでも時間がかかる。数日の余裕はあるはずだ。

だから、気分転換に森の中を歩こう。

*

久々に森の深いところまで来た。

普段であれば家の周りで事足りるので、基本的にはそんなに奥へは行かない。他の魔物を刺激してしまつて、面倒ごとになつてしまう恐れがあるからだ。さすがに自分たちの領域を守るために出てきた奴らを殺めるのは気がひける。

とはいえ。

今現在、森の深部を進んでいるわけだから、余計な混乱を生じさせ

ないよう、対策はしてある。
改竄者カクスマモノ

姿や音、匂いなどといった五感にまつわる情報を消し、更に気配も消せる隠密特化の隠蔽スキル。半径100キロメートルまでは姉からでも何の憂慮も無く逃避することができ、半径10キロなら何となくの位置しか分からない。

つまりは、かなりの実力者であってもそう簡単には気づかれない。
……実はその距離まで近づかれるとほぼ詰みなのだ。

そんなわけで、隣で寝ている大熊をスルーしつつ、どんどん森を進んでいく。なかなか深い森ではあるが、日が結構差し込むので意外と明るい。木陰に入れば涼しく、暑くともすぐに休むことが可能である。

それ故に、この森から出ていかなければならないのが何とも惜しい。

できることなら、このジユラの森に今後百年は定住したい。

「まあ、どだい無理な話なんだがなあ。」

再び、溜め息をつく。

気分転換はまだ続けなければいけないらしい。

*

林地を抜け、一層明るい場所に出る。

太陽の光が視界を覆い、思わず目を瞑る。

ゆつくりと瞼を開け、光に目を慣れさせる。

視点が定まる。空は、快晴だ。

視線を空から地に移す。

………?

なんだ、アレ。集落か？

目前には木で出来た家屋が並んでいる光景があった。

粗末ではあるが、道らしきものも存在している。

人が開拓でも始めたか？

最初はそう思った。が、ジユラの森は余程実力のある冒険者でないと訪れないはずである。その一番の理由であるヴェルドラが居なくなったとはいえ、多種多様な魔物が住み着いているのだから、この段階での開拓は無謀だ。そうであったにしても、大規模な討伐隊でも組まれるだろう。

では、魔王の誰かが新たな領地に加えたか？

それもあり得ない。何故なら、まだ不可侵条約は解消されていない。

解消されたなら、姉はいの一番に跳んでくる。二百年も会っていない弟とかいう特大のエサがあるのだ。娯楽に飢えた姉が、喰いつかないわけがない。

魔王たちは、きつと集まってすらいない。だから大丈夫。

……。

さて、集落が何が原因で出来たのか。

最も高い可能性として考えられるのは、一つ。

——魔物の統率個体が現れた。

それも知能が高いタイプのユニークモンスターだ。

このあたりは昔からゴブリンの村がある場所だ。

となると、その上位個体か？

「おい、隠れてないで出てきたらどうだ？」

バツ、と顔を上げる。視線の先には青く丸っこいフォルムの魔物、スライムがいた。スライムは俺をじつと真っ直ぐに見つめている。

——こいつ、解析系スキル持ちか！

先ほど話した隠蔽系スキルだが、一つ、致命的な弱点がある。

それは、他スキルとの併用、及び半径十メートル圏内の鑑定、索敵、看破といった解析系スキル持ちには問答無用で気配がわかってしまうことだ。なので、姉の竜眼ミリムアイでよくバレる。そんなもって半径10キロ以内に入られるとよく逃走劇鬼ごっこに発展する。ちなみに最長は30分。

観念して大人しく姿を現わす。解除はしない。

弱点付きの、このスキルだが気配や姿がバレても種族、魔素量、及び改竄者カクスマ以外の使用スキルが判別不可という効果も持つ。ただし、究極能力持ちには分かっってしまうが。

「それで、用件はなんだ。」

訝しげな雰囲気醸し出す。恐らく、スキルの影響で正体がわからないからだろう。

「いや、散歩してただけだ。」

「散歩するだけでそんな大層なスキルを使うものなのか？」

「魔物が襲ってきては面倒だからな。ここへ来たのも偶然だよ。害意はない。それにどうせー。」

言葉を切る。見ず知らずの相手に言うものでもない。その思いが次の言葉を続けさせない。

「どうせ？」

しかし、相手は続けるよう促す。不信心。未知のモノに対する警戒。

これ以上は面倒になりそうなので言葉を紡ぐことにした。

「どうせ近々、この森を去ることになるだろうからな。」

「どうということだ。」

一際大きな警戒心。たぶん、言葉が足りなかった。これでは、相手に良からぬことを予期させる言い方ではないか。

「ああ、いや。オレの話だ。オレが近々、このジュラの森を去るんだ。

言葉が足りてなかった。要らぬ不安を抱かせてすまない。」

慌てて取り消す。

警戒を解かれる。

「なんだ。それならそうと、早く言ってくれば良かったのに。ようこそ、俺たちの村に。歓迎するよ。」

……。ちよつと待て。チヨロすぎないか？

「ま、待て。オレが騙そうとしているとは考えなかったのか。」

「……………？騙そうとしたのか？」

「いや、違うが。」

「なら、いいんじゃないのか？」

「いやいやいやいや……………」

警戒を解いて即座に歓迎モードはさすがにビビる。しかも、俺は意図的に出自を隠している。看破系スキル持ちのコイツにとって、胡散臭いにも程があるだろう。

「何者かわからないのに、村に入れて平気なのか。」

「あ、隠している自覚はあったのか。」

「あつたのか、じゃない！不用心だろ!!」

「心配してくれるのか？」

「するわ！こんななんだつたら、誰でもするわ!!」

「はは、ありがとう。いい奴だな、お前。」

そうやってスライムは笑う。

幾ら何でもお人好しが過ぎる。先行きが心配になる。

「本当に大丈夫なのか……………」

「大丈夫だって。それにヘタレみたいな気配だし。無害だろ。」

「ヘタレ!？」

そんな失敬な！一応、竜種の末裔とか子だぞ、オレ!!!

だというのに、この扱いとは、アレ？もしかしてオレ、威厳無い??
「天におはします母よ。そして偉大なる父よ。オレは誰からも畏れられることのないダメな子です……………」

「そんなに凹むなって。オレが言い過ぎたつてば。」

スライムが跳ね回って励ましてくれるが、お前に付けられたこの傷は根深いからな。いやでも、たった一言で揺らぐオレの精神が弱かつ

ただけでは……………。

「あー！こんなところに美味そうな肉があるぞー！」

「……………」

「美味しい水もだー。」

「……………」

「早くしないと無くなってしまいかもなー。量は限られているからなー。」

「………………。食べるが、この森は資源が豊富でやろうと思えば直ぐに上等の肉ぐらい、手に入る。」

「そーなんだ！それならオレも食べてみたいかなー？」

「……………」

「村のみんなにも食べさせてあげたいなー。誰か獲ってきてくれないかなー。」

「……………」

「獲ってきてくれたら、みんな喜ぶのになー。諸手を挙げて歓迎するだろうになー。」

「……………」

「……………」

数秒の見つめ合い。

「だあああああ!!!わかったよ！獲ってくるよ!!それでいいな!!!」

「いくやく。ホントにありがたい。助かるなあ。優しいなあ。」

ものすごく意地の悪い笑顔をしているだろうスライム。

嵌められた感。

猛スピードで森を駆ける。

「おーい。名前聞いてなかった。名前はー？」

「セリムだ!!名を聞いたらそっちも名乗れええ!!!」

「リムルだ！リムル！テンペスト!!!」

ほんの少し、振り返ってみれば、点のようにみえるスライム。否、リムル。絶対に超絶美味しい肉獲ってくるからな……………。覚悟しておけよ……………！

「ま、味覚が無いから、味なんてわからないんだけどな。」

遠ざかっていくオレを見ながら、リムルがそんな眩きをしていたことを、オレが知る由も無い。

魔物の統率者②

焚き木の周りを囲む。

炎はユラユラと揺らぎ、パチパチという音を立て弾ける。

辺り一帯は暗く、木々が不気味にざわざわと騒ぎ出す。

そんな心細くなるような夜の森の様相を気にも止めず魔物たちは踊り、歌い、飲み食いをし、時に笑い、時に大声を上げたりして、この饗宴を思い思いに楽しんでいる。

これを築き上げたのは、スライム。妖魔族のリムルⅡテンペストだ。

ジュラの森の魔物たちは常に弱肉強食の世で日々生存競争に明け暮れている。支配することは有つても、元々共生関係の魔物同士でなければ、他種族が協力し合うことはほぼ無い。だというのに、ゴブリン族と牙狼族の二種が対等に肩を並べている。何の怨嗟も悔恨も無く。

それをオレは、尊いと思った。

「混ざらないのか？」

そう言いながら、リムルがびよんびよん跳ねながら駆け寄ってくる。

「ああ。遠くから眺めてみたいと思つてな。」

ゴブリンたちの集落が一望できる高台。俺はその上にポツンと一本だけ存在している木に寄りかかり、宴の様子を見下ろしていた。ツマミの肉と酒、はないので水もちやつかり持つてきている。

「もしかして、ヒト混みが苦手なのか。」

「んー。まあ、それもある。」

人目を避けようと辺境に住んでいたことだし。他者との関わりはここ二百年ほど絶っている。今となつてはどう他人と関わつて良いかわからなくなつてきている。自業自得だけれども。

しかしヒトが苦手か、と言われればそうでもない。

「そうなのか？」

おうとも。これでもジュラの森へ来る前は、傭兵をしていた。

傭兵として人の国を転々としていたし、その過程でたくさんの人だけでなく、魔物とも会った。……殺伐とした関係であることが大変多かったが、友誼を結んだ奴も居なかったわけではない。何やかんやでかなり充実した生活を送っていた。……送っていたんだがな。」「……。」

ああ、そう気を遣わなくていい。親交を絶つたのは、たいした理由じゃない。大切な人を亡くしたとか、裏切られたとか、そんな大層な出来事が起きた訳じゃない。

「……なら、どうしてなんだ。」

リムルも知的好奇心には勝てなかったらしい。気まずそうに数巡迷った後、そう聞いてきた。

「弱かったからさ。」

「……。隠れるのも下手だったしな。」

「手厳しいな。……事実だから、仕方ないんだけども。」

「……で、弱いつてのは力か。それとも心か。」

「どちらもだ。」

ツマミの肉はもうすでに最後の一口のみとなった。

それを咀嚼し呑み込んでから、再び口を開く。

「長い時を生きているとな、自分がいかに矮小な存在か、よくわかってくるんだ。強い奴はすぐ強くなるが、弱い奴はいつまで経っても弱いままだ。積み上げてきた年月も、才能の前には敗ける。」

「長生きなのか。」

「ツツコむとこ、そこか？並みの魔物よりかは長生き、とだけ。」

「なあ、長く生きてるなら、知略を磨いて財力を蓄えるとか他のやり方はできなかったのか。」

「そりゃあ、考えたさ。けどこの世界じゃ、たった一つのミスで全て無に帰す。結局、武力が全て、だからな。しかも、個人の力だけでな。」

「そうとも限らないだろう。」

リムルは少し怒っているようだった。

「一人だけだと、何もできない。たとえ、強者だろうと、知恵を振り絞ってたくさんのヒトが力を合わせれば倒せるだろ。」

「一理ある。が、本当に強い奴相手だと、知恵者は重用されても、強者は倒せないんだよな、コレが。」

一息吐く。心を鎮め、あくまで冷静に語る。

「ーその一例が、姉だ。」

「姉？」

「諸事情あつて名前は伏せるが、ものすごく強くてさ。策略とか財力とかそんなの全部御構い無し。むしろ上等、ってな感じなワケよ。」

「へえ、すごいんだな。セリムのお姉さん。」

「すごいとも。……昔は、オレも姉に及ばないまでも遊んでも支障が無いくらいだったんだけど。姉が強くなりすぎたのか、オレが弱くなっていったのか、じゃれ合いすらキツくなってきてな。」

「仲はいいんだな。」

「親はオレたちが小さい頃に死んでしまったからかな。姉弟仲は良いんだよ。……歳を重ねるごとに強くなっていく姉さんを見て、自らの弱さを痛感して惨めになったのさ。」

「そうか……。」

沈黙。微妙な空気が流れる。

「……ところで、ヒト混みが苦手だそうけれど、この集落の様子はどうだね、セリム君？」

リムルが態とらしく朗らかに茶化すように、話を振る。この妙な空気を晴らすためかと思われる。オレも気まずいのは嫌なので、その話題に乗ることにした。

「集落としては及第点。だが、まあ……家の作りがお粗末だな。」

「だよねえ……。」

はあ、とりムルは深い溜息を吐いた。本人としても、この出来に満足していないのだろう。あからさまに落ち込んでいる。

「家造りのノウハウが無いからなあ。やっぱり、技術者を招くべきだよなあ。セリム君、当てとかないですかね。」

「無い。このあたりのツテはさっぱりなんだ。」

「そっかああああ。」

リムルは頷きつつも、溜息を吐く。随分と頭を悩ませているので力になりたいが、無いものは無いので仕方がない。

「もしかすると、ゴブリンたちなら知っているかもな。」

「……………ホント?」

「オレは生存競争とかと無縁の地で過ごしていたから情報が入ってこなかったが、ゴブリンたちはそうでもないからな。情報がいやでも入ってくる。手に入れるざるを得ないはずだよ。」

「……………ちよつとその理論分かりそうで分からないけど、取り敢えず聞いてみることにするよ。ありがとう。」

「……………結局、お前の配下の者達に聞かなきゃいけないってのも、オレからの情報の収穫は全く無かった証のようなもんだがな。」

「素直に礼は受け取っておけよ。」

「捨くれ者なんで。」

そのあと他愛もない雑談で夜はさらに更け、そして朝を迎えたのだった。

*

朝方、リムルが見送ってくれるとのことと、リムルたちの住む集落の外れの方に来ている。

「たいして寝てないのに帰って平気なのか?」

「平気、平気。体は丈夫だから。」

呆れた目でこちらを見てくる。

「ジュラの森から出て行くって話だし、積もる準備だってあるはずだろうに。」

「今から帰って支度しても問題ない。」

「タフだねえ……………」

遠い目で空を見つめているが、何かあったのだろうか。

「とはいえ、お前だって支障は出ないだろ?」

「…………俺はそもそもそういう身体なんで。」

「さいですか。」

なら、何も文句はないはずだというのに、心配性め。

「そろそろ行くわ。荷物整理が待ってる。」

「…………また、会えるといいな。」

「死ななければ、会えるだろ。ゴタゴタが落ち着いたら会いに行くし。」

「楽しみに待つとするよ。」

別れの挨拶を交わす。しばらくは、サヨナラだ。

その前に、一つ言わなければならぬことがある。

「なあ、リムル。」

「…………ん、何だ。」

「魔王には、気をつけろよ。」

「…………魔王?」

リムルが頭の上に?マークを出している。

そもそも魔王という概念が分かっていないな、こりや。

「とつても強い奴ら、とでも思っとけ。」

「…………複数いるのか。」

「総称だからな。…………ジュラの森は、資源も労力も豊富だ。ヴェルドラが居ない今、狙っている奴らもいることだろう。」

ヴェルドラ、のあたりでビクツとしていたが、あとは深刻な表情でオレの話に耳を傾けていた。危機感を抱かせることには成功したようだ。

「…………お前がこの森から出るのも、それ関連か?」

「…………まあ、な。」

姉が来そうだから逃げます、とは口が裂けても言えない。

「頭には入れておくよ。ありがとう、警告してくれて。」

「世話になったからな。」

改めて集落を見渡す。家作りの作業中であるが、そこには笑顔があった。リムルは良き頭領として君臨しているようだった。

「この集落の風景、オレは好きだよ。」

「俺もだ。」

だからこそ、魔王の支配下に入らざるを得なくなるであろう未来が口惜しい。一夜だけではあったが、止まりたいと思えるほどに。

しかし、オレがいては壊してしまうことだろう。主に姉のせいだ。

「それじゃ、さようなら。………集落の発展、頑張れよ。達者でな。」
「セリムもな。」

魔物を率いる特異なスライム、リムルⅡテンペスト。一夜だけの関わりであったが、その存在は確とオレの脳裏に刻まれたのであった。こうしてリムルとオレの行く先は違えたが、しかし再会するのはそう案外遠くないのかもしれない。

遙か遠き望郷の黄金郷（エルドラド）

整備されていないゴツゴツした道を、荷車を引いて進んで行く。時折、石か凸凹ある地形のせいで車体が揺れることで、荷物が荷台から溢れ落ちそうになるが、力ずくで揺れを抑えてどうにか事なきを得ている。

いつ物をぶちまけても可笑しくない、なんとも危なっかしい綱渡り。

そんな荷台の様子を横目で見つつ、ハア…、と溜息を吐く。

なんとも気が抜けない。

ーととりあえず目指すは西方諸国最大国、ファルムス王国。

気合いを入れ、再び歩き出す。

進むは荒れに荒れている獣道。あからさまに車輪がガリガリと音を立て、小石で車体が跳ねるわ、獣畜生どもが襲ってくるわで散々ではあるけれども。

姉と遭遇するより圧倒的にマシンなのである。

*

ここで、最終的な目的地について話しておこうと思う。

姉に見つからない場所であることは言うまでもなく、具体的な場所の見当であるが、なるべく辺境であるのが望ましい。というよりは忘れ去られた竜の都から最も遠い場所。魔王の絶対不干渉領域が存在しなくなった以上は、物理的に遠ざかるに限る。

その場合、大陸内で一番良いのは不毛の大地であるが、あそこは確かダクリユールなる魔王が治めていたし、悪魔が湧くという噂もあ

る。

いざこぎは姉襲来の次に恐るべき事態である。

となれば、あとは一択。別大陸に逃げる。

つまりは黄金郷エルドラド。

別大陸はここしかないだろうし、少なくとも俺はここしか知らない。
い。

幸いにも旧い知人が居り、頼るとすればエルドラドしかない。

だがしかし、一つ問題があった。

——エルドラドには、どう行けば良いのか。

そう、本土にあてはあっても、その前に行き方がわからないのだ。

これのせいでエルドラドは今まで選択肢の中に入っていないかったように思われる。

エルドラドは自然と資源に恵まれており、食糧難も起き辛く資源を他所から仕入れる必要がない。なので、国交はよく知らないが経済面では自己完結している節がある。だから、余程のことがないとエルドラド行きの船が無いのだ。一から船を造る選択肢もあるが、そんなこととしてたら姉に捕捉される。あと素人の作った船とか沈みそうだし、初心者が船の操縦とかそんなの遭難する、とか考えられるし。

詰んだ、と正直思った。俺の貧相な想像力ではエルドラドしか思い浮かばかったため、それ以外の場所だとそれこそ不毛の大地くらいしかなく、すわ（悪魔や魔王と格闘してでも）住み着いてやるよお！と千年越しのヤケを起こすかと思われた。が、しかし、俺は思いとどまって考えてみた。

——一分からないなら調べればいいのでは？

というわけでユニークスキルミラタスモ閲覧者を使用。

これは半径kmを空からの視点で見ることの出来るスキルで、一人映るくらいまで注力して見ることができる。がしかし、視覚のみで音も匂いもしないので、読唇術でどうにか聞き取り調査を、そして並行して視認による裏付け調査を行う。結果、西方諸国で実に興味深い事実が判明した。

なんと、エルドラドと人身売買を行なっているそうだ。

しかも異世界から召喚された子供を、エルドラドの主である魔王レオンが、だ。

裏社会の話とはいえ東の帝国に本拠地を置く巨大な秘密結社がわざわざ西方諸国に拠点を置き、一国の長、しかも魔王が直々に引きをしているのだ。きつと両国間も相当深い繋がりがあるに違いない。

話によると密かにふつうの商品の流通があるみたいなので、そつちを選ぶが。

ということ、まず目指すはファルムス王国。

規模一番デカいから、という安易な考えではあるが、想定される到達時間に丁度エルドラドからの船が停泊するそうなので、余分な荷物は売り捌いてから不法渡航する予定だ。金を積んだら正式に乗せてくれないかな。姉さん、情報収集能力皆無だし。そもそも人間に興味無いし。そこから居場所がバレることは無い。そのあたりの心配いらないのはありがたい。余計な心配が減る。

そう考えれば足取りは自然と軽やかになる。思わず顔がほころぶ。俺の安寧の日々はそこにある。目指せ、黄金郷。

思いつきり足を踏み出したところで、ガシヤン、と不穏な音がした。後ろを振り返れば、陶器の破片が散らばっていた。

ーあ、一番高いティーカップ割れた。

幸先不安過ぎる。何も無いといいが……。

*

《……ル……、……者……を再……し……》

《……に……？……／……》

《……に……た。》

《……………を……………か？……………／……………》
《……………の『……………断』……………、……………さ……………》

《なお、この結果は秘匿されます。》

*

不気味な像、金でできた机に豪華な椅子、そして高級な革と綿の使われる紫のソファ。一見すると豪華だが悪趣味とも成金趣味とも捉えられかねない部屋。その一室に座すはジスターヴの王、クレイマン。魔王が一人である。優雅に紅茶を啜りながら、近々破棄されるジユラの森不可侵条約についてと新たに誕生するであろう魔王ーすなはち、豚頭オーク・ディザスター帝について思考を巡らせる。

己が所属する道化連盟の働きによりほぼ確実にジユラの森を支配下に入れる策。他の魔王たちの介入が一番の不安要素であったが、それも数名を一枚噛ませることで可能性としてゼロにまで近づけた。

利権を幾分か獲られるであろうことが痛手ではあるが、豊富な資源の採取、奴隷市場の拡大等々、それでも余りある恩恵を受けることができる。それにより、

「破壊の暴君」には、そういったことは興味ありませんからね。」
破壊デストロイの暴君ミリム・ナーヴァは強者との戦闘以外に惹かれることは珍しい。オーク・ディザスターについても新たな強者遊び相手という面にのみ、興味を示していた。利権を獲得すること無く、最古参の魔王でありかつて世界を滅ぼしかけたという云われもあるので他の魔王の抑止力としても有効である。なんとも都合の良い話である。

「フレイと手を結んで正解でした。」

独りごちる。フレイがミリムの説得に当たったことにより、こちら

に被害が及ぶまでも無く良い利益を得られるのだ。

——ええ、感謝していますとも。今後とも良い駒として働いて欲しいものです。

クレイマンにとって、道化連盟以外の者は使えるか使えないかの駒でしかない。今回フレイは使える駒だった。それ以外に思うことは、無い。

——ミリム、と言えば。

ふと、扱い難いと思っていたが意外と扱いやすかった駒、ミリムについて想起することがあった。

——前々から、ジユラの森の不可侵の条約についてやけに気にしてましたね。

食いつき方についてもそうだがヴェルドラのことを持ち出し慰めれば、暫し逡巡した後、引き下がるという出来事が幾度かあった。

当時はあのミリムということもあり多いに焦ったが、何回も続けば自然と慣れる。だが執着に対して不気味なほどあつさり引き下がるものだから妙な引つかかりを覚えたものだ。

——少し、調べてみましょうか。

そんな考えがよぎる。ミリムの弱みかもしれない。暴君の弱みを握れば上手い具合に操れるやも——

——いえ、やめておきましょう。

それは竜の逆鱗とも考えられる。逆鱗でなくとも、機嫌を損ね要らぬ損害を被るのは正直ごめんだ。慎重に、冷静に、振舞ってこそそのクレイマンだ。力の部分はラプラスやティア、フットマンの得意分野で、知略は自分とあのお方の担当である。であるならば失敗は許されない。あのお方と同じでなくとも似通った土俵に立つのであれば。

——全てはカザリーム様とあのお方のため。

計画の成就が最優先である以上は余計なことに気を回してはならない。

——私は次の手について考えましょう。

オーク・ディザスターの件は実行段階に入った。ならそれはラプラスやゲルミュッドの仕事である。策略は常に先を見据えなければな

らず、私にできるのは場を整え、現実性を高めるのみ。

こうしてクレイマンは思考に沈む。クレイマンは策士だ。蜘蛛の糸のように策を巡らし、絡め取るのがクレイマンの役目だ。

しかし、いつかは糸が切れる日が来る。切られれば、そこに乗る蜘蛛は落ちるのを待つだけ。

張られた糸が切れるまで、あと少し。